

主題 C 「地域での防犯を考える」における実践と 教育効果に関する検証

—駐輪場での施錠率向上のための啓発および 防犯ウォーキングアプリによる地域安全マップ 作成の効果も含めた検討—

大久保智生（教育学部准教授）
米谷 雄介（創造工学部助教）
西本 佳代（大学教育基盤センター講師）
吉井 匡（法学部准教授）
皿谷 陽子（福山大学人間文化学部助手）
永森 美帆（教育学研究科修士課程 2 年）
八重樫理人（創造工学部准教授）
田中 晶（香川県警察本部）
高地 真由（香川県警察本部）
吉見 晃裕（香川県警察本部）
森田 浩充（香川県警察本部）

1. はじめに

本稿は、平成 30 年度主題 C「地域での防犯を考える」の実践記録である。主題 C「地域での防犯を考える」は香川県警察との連携事業の一環として平成 29 年度から開始された。香川県警察との連携事業は、香川県の万引き防止をきっかけに平成 21 年に開始された。万引き防止の成果については大久保・時岡・岡田編（2013）や大久保（2014）にまとめられ、現在も万引き防止の連携事業は継続している。その後、特殊詐欺防止（大久保・石岡・堀江・垣見・岩田・山地・木村・山口・三好・森田、2016）や安全安心まちづくりの推進（大久保・有吉・千葉・垣見・山地・山口・森田、2017）など多岐にわたり、連携事業を拡大してきた。現在は、防犯ボランティアの活性化（大久保・垣見・太田・山地・高地・森田・久保田・白松・金子・岡田、2018）も含めた地域と店舗の防犯活動の活性化を共同で推進している（大久保・山下・田中・高地・吉見・森田・加藤・白松・久保田・金子・岡田、2018）。こうした一連の連携事業の一つとして、大学生の防犯活動の理解・促進と未来の防犯ボランティアの育成を主眼とした科目を立ち上げることとなった。大学生の犯罪防止も視野に入れ、県警察と大学が連携して、毎回の授業を行っていくというスタイルは他に類を見ないものであるといえる。

2. 科目概要

2-1. 本科目のねらい

本科目は、県警察と連携し、様々な防犯上の課題を探求・発見し、解決策を考え、実践するという、フィールドワークを取り入れた科目である。

本科目では、大学生が巻き込まれる犯罪や香川県で多い犯罪の防犯活動への参加を通して、効果的な防犯対策を考え、提案し、地域での防犯を実践的に学ぶことに主眼をおいている。具体的には、大学生が最も巻き込まれる自転車盗に関する駐輪場でのフィールドワークを行い、自転車盗の効果的な対策を考え、提案する。また、高齢者に関わる犯罪の効果的な対策を考え、提案する。地域での安全・危険箇所を点検するためのフィールドワークを行い、防犯ウォーキングアプリを用いて地域安全マップを作成する。

本科目の目的は、地域の防犯活動に参加した上で、実施可能な防犯対策を提案し、効果的な地域での防犯活動を理解することである。さらに、授業終了時には、地域での防犯活動に関心（共通教育スタンダードにおける「地域に関する関心と理解力」に対応）を持ち、安全・安心な地域づくりを担う人材を養成することも目的とする。

2-2. 授業構成

本科目は、「専門家による講義」、「フィールドワーク」、「フィールドワークのまとめとしての防犯対策の提案」から構成される。

「専門家による講義」では、様々な防犯に関わる専門家から、フィールドワークにつながる講義を受けることとした。暮らしの見守り隊や万引き防止コンサルタント、社会福祉士、防犯協会、弁護士、犯罪心理学者、法務教官など様々な立場からの防犯に関する講義を受ける構成とした。

「フィールドワーク」の授業における位置づけとしては、様々な活動を行っている専門家による講義を聴講した上で、フィールドワークを行うこととした。なぜなら防犯の考え方や高齢者への接し方を学習することなく、フィールドワークを行うことは不可能だからである。また、フィールドワークの場所は、大学構内の駐輪場、地域の安全安心まちづくり推進店舗、大学周辺とした。このように、普段、何げなく通っていたり、使っていたりする場を実践的な学びの場としていく構成とした。

「フィールドワークのまとめとしての防犯対策の提案」については、フィールドワークの成果として、班ごとに授業内で効果的な対策の提案のプレゼンテーションを行った。さらに、それぞれの対策の提案に対して、警察などの専門家からコメントをもらい、警察と連携して実施可能な対策を考えていくこととした。このようにフィールドワークに基づいて専門家へのプレゼンテーションを行うことで、フィールドワークの成果を実際の地域の防犯活動に生かしていく構成とした。

3. 今年度における実践

3-1. 実施体制

(1) 担当教員

今年度は、前年度に引き続き、大久保、吉井、西本の3名で本科目を実施した。担当教員は、それぞれの専門（心理学、法学、教育学）の立場から、毎回の授業の終わりにコメントするだけでなく、調査などのフィールドワークについては責任者として、引率を行った。さらに、駐輪場調査、店舗調査でのプレゼンテーションの仕方や資料の作り方についても、1年生が多いことから、教育的指導を行った。

(2) サポート体制

香川県警察の全面協力のもとで様々な取り組みを行った。香川県警察は、県内の犯罪情勢による講義、フィールドワークのコーディネート、防犯対策へのコメントだけでなく、毎回の授業に参加し、警察の立場からのコメントを行った。

(3) 外部講師

外部講師には、それぞれの専門の立場から、地域での犯罪予防や犯罪防止について、講義の後で学生たちがフィールドワークに出ること、その後で学生たちがフィールドワークのまとめとしての防犯対策を提案することも考慮して、講義を行ってもらうように依頼した。また、可能ならば、グループワークなども取り入れてもらうように依頼した。

3-2. 履修状況

本科目「地域での防犯を考える」はフィールドワーク先との兼ね合いで、前年度と同様に履修人数を25名に制限している。今年度は第1希望が28名、第2希望が10名、第3希望が2名であり、抽選を行った。前年度は第1希望が36名、第2希望が3名、第3希望が2名であり、同様に抽選を行った。前年度は主題Cの説明会で授業内容のプレゼンテーションを行ったため、多くの学生の興味を引き、第1希望が多くなったと考えられる。

表1は本科目を履修した学生数を学部別及び学年別に示したものである。学部については、様々な学部の学生が履修していることが示された。また、学年については、前年度と同様に多くが1年生での履修であることが示された。地域での防犯が様々な学部の学生にとって、関心のあるテーマであり、そのために多くの学部の学生が履修したと考えられる。

表1 平成30(2018)年度主題C「地域での防犯を考える」履修状況

	1年	2年	3年	4年	合計	参考:前年度
教育学部	5	0	0	1	6	3
法学部	3	0	0	0	3	5
経済学部	0	0	0	0	0	8
医学部	1	0	0	0	1	2
創造工学部	5	0	0	0	5	6
農学部	10	0	0	0	10	1
合計	24	0	0	1	25	25

3-3. 授業内容

本科目「地域での防犯を考える」は、前述のように、「専門家による講義」で防犯に関する知識を得た上で、「フィールドワーク」を行い、「フィールドワークのまとめとしての防犯対策の提案」を行う構成であるため、この構成に基づいた授業内容を企画した。表2は本科目の15回の授業内容を示したものである。なお、外部講師の日程の関係もあり、シラバスとは若干の変更があった。

第1回では、ガイダンスとして、授業の概要や目的の説明を行った。また、様々な学部
の学生が受講しているため、学生や担当教員、警察がそれぞれ自己紹介を行い、その後、
学生のグループ分けを行った。

第2回では、香川県の犯罪情勢に関するゲスト講師による講義として、香川県警察が香
川県の犯罪情勢と防犯対策について、特に自転車盗、万引き、特殊詐欺、地域防犯活動の
観点から説明を行った。

第3回では、地域での防犯に関するゲスト講師による講義として、香川県婦人団体連絡
協議会香川県くらしの見守り隊観音寺支部の高岡令子氏と大西信子氏が地域での具体的
な防犯活動について説明を行い、見守りかるた作りを行った。

第4回では、最初のフィールドワークとして、香川大学の学生の問題行動調査（大久保・
西本、2016）で自転車に関するトラブルが多いこと、さらに、香川大学の駐輪場は県内有
数の自転車盗の発生現場であることから、大学構内の駐輪場での施錠率調査を行った。グ
ループごとに香川大学幸町北キャンパスと南キャンパスの駐輪場での施錠率や鍵のかかっ
ていない自転車の特徴、駐輪場の特徴について、調査を行った。

第5回では、フィールドワークのまとめと自転車の窃盗対策の提案をグループごとに行っ
た。各グループ10分の持ち時間でプレゼンテーションソフトを用いて行った。その後、
警察からのコメントをもらい、教員がそれぞれの専門の立場からコメントを行った。

第6回では、自転車の窃盗対策の提案を受け、大学構内の駐輪場に掲示する施錠率向上
のための啓発ポスターの作成を行った。被害に遭う可能性があることに焦点を当てたポス
ターと、窃盗する人がいることに焦点を当てたポスターの2種類をグループごとに作成し、
多数決を行い、各条件で3種類掲示することとした。そして、2か月後に施錠率の変化に
ついて調査を行った。

第7回では、店舗での犯罪対策に関するゲスト講師による講義として、万引き防止コン
サルタントの伊東ゆう氏が万引き犯罪の現状、高齢者の万引き、未然防止のための店内声
かけについて説明を行った。フィールドワークのために、特に、万引きされやすい店舗の
特徴などについてもふれてもらった。

第8回では、認知症サポーター養成講座として、高松市社会福祉協議会の大川裕子氏が
高齢者の認知機能と高齢者と関わる際のポイントについて説明を行った。受講後に、受講
した証として、学生全員にオレンジリングが配布された。

表 2 平成 30 (2018) 年度主題 C「地域での防犯を考える」授業内容

回	内容	活動場所
1	ガイダンス (授業の概要と目的の説明、自己紹介、グループ分け)	香川大学
2	香川県の犯罪情勢に関するゲスト講師講義:警察による講義 (香川県の犯罪情勢と防犯対策:自転車盗、万引き、特殊詐欺、地域防犯活動)	香川大学
3	地域での防犯に関するゲスト講師講義:香川県くらしの見守り隊による講義 (見守りかるた作り)	香川大学
4	駐輪場でのフィールドワーク (大学構内の駐輪場の調査)	香川大学駐輪場 (幸町北および南キャンパス)
5	フィールドワークのまとめと自転車の窃盗対策の提案および専門家からのコメント (各班ごとに結果の発表、対策の提案、警察によるコメント)	香川大学
6	自転車の窃盗対策の提案 (施錠率向上のためのポスター作成)	香川大学
7	店舗での犯罪対策に関するゲスト講師講義:万引き防止コンサルタントによる講義 (万引き犯罪の現状、高齢者の万引き、未然防止のための店内声かけ)	香川大学
8	認知症サポーター養成講座:高松市社会福祉協議会による講義 (高齢者の認知機能と高齢者と関わる際のポイント)	香川大学
9	店舗でのフィールドワークおよび買い物支援活動 (店舗での聞き取り調査および買い物支援)	店舗 (コープ扇町店、コープ栗林店、マルナカ宮脇店)
10	フィールドワークのまとめと高齢者の防犯対策の提案および専門家からのコメント (各班ごとに結果の発表、対策の提案、警察によるコメント)	香川大学
11	地域での防犯、再犯防止に関するゲスト講師講義:防犯協会連合会、弁護士による講義 (地域での防犯活動の重要性、弁護士の観点からの再犯防止)	香川大学
12	地域安全マップに関するゲスト講師講義とフィールドワーク:犯罪心理学者による講義 (犯罪機会論と大学構内での安全・危険箇所点検)	香川大学構内 (幸町北および南キャンパス)
13	防犯ウォーキングアプリを用いたフィールドワークの準備 (防犯ウォーキングアプリのインストールと地域安全マップ作成のポイント)	香川大学
14	防犯ウォーキングアプリを用いたフィールドワークとフィールドワークのまとめ (大学周辺の地域安全マップ作成と各班ごとに結果の発表)	香川大学周辺 (幸町、番町周辺)
15	再犯防止に関するゲスト講師講義と全体のまとめ:法務教官による講義 (矯正教育の観点からの再犯防止)	香川大学

第 9 回では、2 回目のフィールドワークとして、店舗での万引きの起きやすい場所や対策を検討するための店舗での調査と高齢者の防犯の意味も込めた声かけによる買い物支援を行った。店舗での調査では、万引き犯罪とその対策について店長にインタビューし、店舗内を回り、死角や防犯カメラなどの防犯対策のチェックを行った。買い物支援では、万引きや特殊詐欺対策で最も重要な寂寥感の解消になるように、1 人で買い物に来た高齢者に声かけを行い、買い物を手伝いながら、話すという活動を行った。

第 10 回では、フィールドワークのまとめと高齢者の防犯対策の提案をグループごとに行った。各グループ 10 分の持ち時間でプレゼンテーションソフトを用いて行った。その後、警察からのコメントをもらい、教員がそれぞれの専門の立場からコメントを行った。なお、優秀なプレゼンテーションを行ったグループには、香川県万引き防止啓発指導者研修会でプレゼンテーションを行ってもらった。

第 11 回では、地域での防犯、再犯防止に関するゲスト講師による講義として、香川県防犯協会連合会の千葉敦雄氏が地域での防犯活動の重要性について説明を行い、あかり総合法律事務所の松井創氏が弁護士の立場からの再犯防止について説明を行った。

第 12 回では、地域安全マップに関するゲスト講師による講義として、福山大学の皿谷陽子氏が犯罪機会論に基づく地域安全マップに関する説明を行った。さらに、地域安全マップ作りの前に、講義の内容に基づき、大学構内の安全・危険箇所の点検を行った。図 1 は大学構内の安全・危険箇所の点検の結果について示したものである。

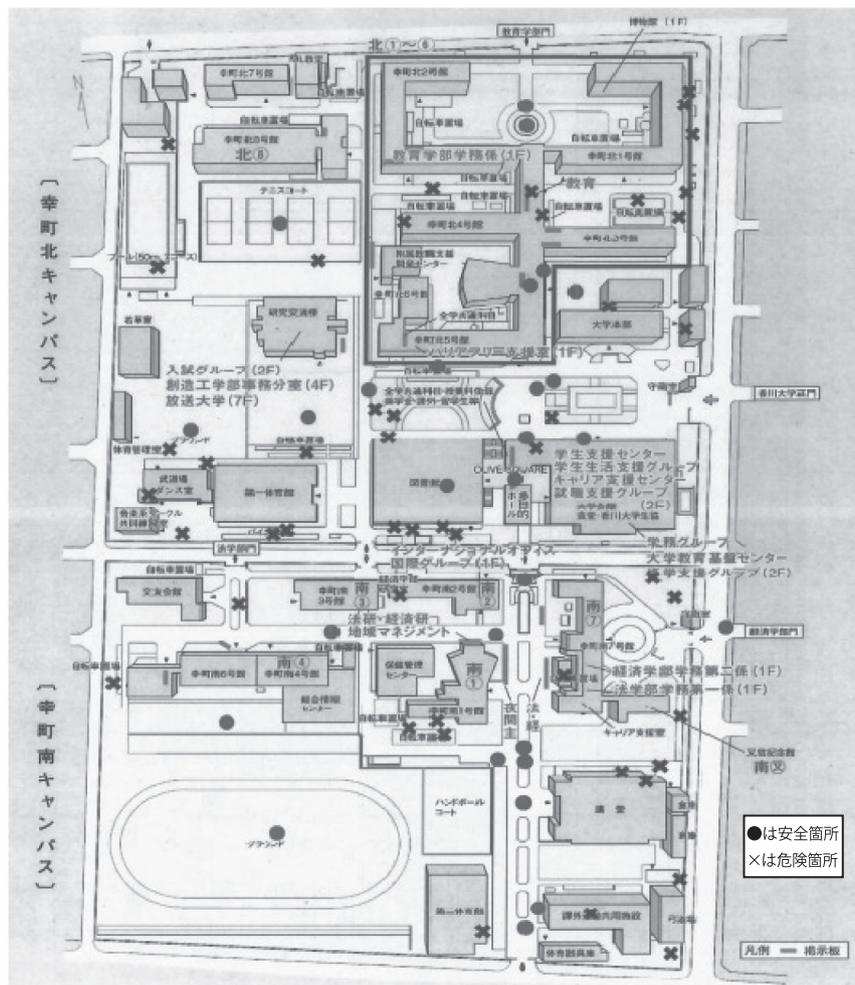


図1 大学構内の安全・危険箇所の点検の結果

第13回では、開発中の防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」を用いたフィールドワークの準備を行った。工学部の米谷雄介氏を中心にアプリのダウンロードを行った。さらに、大久保が地域安全マップ作成のポイントについて説明を行った。特に、判断の理由を表すキーワードとして、小宮（2013）が提唱する安全のキーワードの「見えやすい」「入りにくい」、危険のキーワードの「見えにくい」「入りやすい」について説明した。また、従来の紙ベースで行う地域安全マップ作成と異なり、アプリを用いることで情報が共有しやすくなることなど、アプリを用いることのメリットについても説明を行った。

第14回では、3回目のフィールドワークとして、開発中の防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」を用いて大学周辺の地域安全マップ作成を行った。フィールドワークの前に、小宮（2013）が提唱する安全と危険の判断の理由を表すキーワードについて確認した。ただし、判断の理由には、ユーザー独自の観点や地域特性も存在することが予想されるため、それらの観点を収集することが地域防犯の特徴をより正確に捉えることにつながると考え、これらキーワード以外の観点はコメント欄に記載することをルールとして定めるこ

ととした。こうした説明を行った後に、フィールドワークを行い、その後、グループごとに大学周辺の安全と危険箇所とその理由について発表を行った。

第 15 回では、再犯防止に関するゲスト講師による講義として、四国少年院の長尾貴志氏と相原幸太氏が、再犯防止について矯正教育の観点から説明を行った。また、最終回であるため、全体のまとめとレポート課題の説明を行った。

4. 実践の効果と振り返り

4-1. ポスターによる啓発の効果の検討

ポスターによる駐輪場での施錠率向上のための啓発の効果について明らかにするため、被害に遭う可能性があることに焦点を当てたポスター掲示条件、窃盗する人がいることに焦点を当てたポスター掲示条件、ポスターなし条件の掲示前後の施錠率についてカイ 2 乗検定を行った。表 3、表 4、表 5 は掲示前後の施錠率について、それぞれの条件ごとに示したものである。その結果、被害に遭う可能性があることに焦点を当てたポスター掲示条件においてのみ、掲示後に施錠率が向上することが明らかとなった。

表 3 被害に遭う可能性があることに焦点を当てたポスター掲示条件の施錠率の変化

	施錠の有無		カイ 2 乗値
	あり	なし	
ポスター掲示前	816(89.8)	93(10.2)	3.129*
ポスター掲示後	758(92.2)	64(7.8)	

注：() の中は%。表 4、表 5 も同様に表記。

表 4 窃盗する人がいることに焦点を当てたポスター掲示条件の施錠率の変化

	施錠の有無		カイ 2 乗値
	あり	なし	
ポスター掲示前	722(91.4)	68(8.6)	0.280
ポスター掲示後	617(90.6)	64(9.4)	

表 5 ポスターなし条件の施錠率の変化

	施錠の有無		カイ 2 乗値
	あり	なし	
ポスター掲示前	296(89.4)	35(10.6)	0.025
ポスター掲示後	308(89.8)	35(10.2)	

被害に遭う可能性があることに焦点を当てたポスター掲示条件において、掲示後に施錠率が向上したことから、啓発の一定の効果があることが示唆された。被害に遭う可能性があることに焦点を当てたポスター掲示条件のみで効果が認められたが、これは多くの学生は自転車盗を行わないため、被害に遭わないように注意を喚起する啓発のほうが有効であ

ることを示しているといえる。また、目が表現されたポスターは効果があるとされているが、今回の調査では目が表現されたポスターだけでカイ二乗検定を行っても有意差は認められなかった。万引き対策においても目が表現されたポスターの効果は疑問視されていることから、ある意味妥当な結果であるといえる。今回、2ヶ月間では効果が認められたが、香川大学の駐輪場は県内でも有数の自転車盗の多い駐輪場であるため、施設率向上のために今回のような一時的なポスターの掲示ではなく、持続的な対策が必要であるといえる。

4-2. 防犯ウォーキングアプリによる教育の効果の検討

防犯ウォーキングアプリによる教育の効果について明らかにするため、防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」において報告された報告データと事後アンケートによるアンケートデータそれぞれの検討を行った。さらに、報告データとアンケートデータの関連の検討を行った。

(1) 防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」における報告データの検討

防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」における報告データについて検討するため、各グループの安全／危険箇所の報告数、各グループの判断理由の選択数を算出した。表6は各グループの安全／危険箇所の報告数、各グループの判断理由の選択数について示したものである。その結果、本実証実験における報告総数の最小値は3、最大値は14であった。また、報告総数にはグループごとに偏りがあることが明らかとなった。

表6 各グループの安全／危険箇所の報告数内訳と各グループの安全／危険に対する判断理由

グループ	報告			判断理由（安全）			判断理由（危険）		
	安全	危険	総数	見えやすい 付与数	入りにくい 付与数	その他 付与数	見えにくい 付与数	入りやすい 付与数	その他 付与数
A	6	7	13	5	1	1	7	3	2
B	5	7	12	5	1	0	5	2	0
C	4	10	14	4	0	0	7	1	0
D	1	2	3	1	0	0	2	2	0
E	2	8	10	2	0	2	8	4	8
F	2	4	6	2	0	0	2	0	1
G	0	4	4	0	0	0	2	0	2
H	0	10	10	0	0	0	9	5	0

いずれのグループでも安全箇所よりも危険箇所の報告が多いことから、相対的に危険箇所の発見の方に対象者の意識が向いていたことが示唆された。また、「見えやすい」「見えにくい」よりも「入りやすい」「入りにくい」の数の方が少なかったことから、今回参加した対象者にとって「入りやすい」「入りにくい」による判断が難しかったことが示唆された。さらに、判断理由「その他」に対するコメントをまとめた。表7は判断理由「その他」に対するコメントを示したものである。その結果、対象者の学生たちは交通安全の観点など

も含めて、判断を行っていることが示唆された。また、昼間は安全であるが、夜は危険であるなど、状況の変化に応じた報告を行っていることも明らかとなった。

表 7 各グループの判断理由「その他」に対するコメント一覧

グループ	コメント	
記号	安全報告に付与	危険報告に付与
A	学校の近く。街灯が多い。／見えやすい。／見通しがよい。／車止めもあり、入りにくい。大通りが近く、見えやすい。／全体が見える。／道が広くて、見通しがよい	見通しが悪く、狭い。／周りの建物が高め。／草木が高い。ガードレールがない。／塀が高い。草木整理されていない。／塀が高め。
B	ガードレールで自転車と歩行者の道が分かれている。／見通しが良い。／塀が低い。	街灯が少ない。／荒れている。／明かりなし。／木々が生い茂り、見えにくい。
C	見通しがよく、開けている。／道が広く、見通しが非常に良い。	街灯が少なく、夜は見通しが悪くなる。／見通しがいいが、後ろからくる自転車に注意。／塀の高い建物が多く、外から見えづらい。／夜は街灯の明かりも少なく、非常に暗い。
D	ガードレールで歩道と自転車道が分かれている	周りに電灯が少なく、見えにくい。／塀が高い。
E	大通りに面しているの、見通しが良い。人通りが多い。／道路が広く、見通しが良い。神社なので人がいる。駐在所がある。	カーブミラーはあるが、存在に気づかなかった。角での自転車、歩行者の事故がおきそう。自動車側からカーブミラーが見えにくい。／とびだしがありそう。車がでてきているか分かりにくい。門やフェンスが高い。／大通りに面しているの入りやすい。壁が高い。／暗い。／大通りに面しているの入りやすいが、薄暗く、死角が多い。街灯がない。／壁が高い。街灯がない。／壁が高い。街灯がない。完全に死角。／両サイドの壁が高い。住宅地なので、不審者が住民に混ざっていても分からないかも。暗い。／木が生い茂っていて見えにくい。暗い。
F	大通りで見通しが良い。	横断歩道はあるが信号がなく、車の通りが多い。／街灯がない。／曲がり角で接触事故がありそうのため。
G		電灯が少ないから夜は見えにくい。／塀が高い。／塀が高い。街灯が少ない。／塀が高い。道が狭い。
H		ごみが落ちており廻りからも見えにくい。／回りから入りやすく木で囲まれていて見えにくい。／回りが高く見えにくい。入り口が近いので出た所を狙われやすい。／回りが木で囲まれていて見えにくい。／廻りから入りやすく木で囲まれていて見えにくい。／入りやすく、木があって見えにくい。／塀が高く見えにくい。

(2) 防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」におけるアンケートデータの検討

防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」を用いたフィールドワーク終了後に、アンケート調査を実施した。地域安全マップに期待される能力として、小宮（2006）に基づき、平（2007）や濱本・平（2008）は被害防止能力だけでなく、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力を測定していることから、受講者一人一人に被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力からなる尺度（濱本・平、2008）を用いた。

防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」におけるアンケートデータについて検討するため、被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力の平均値と標準偏差を算出した。表 8 は、被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力の平均値と標準偏差を示したものである。1 から 4 点の 4 件法で被害

防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力において2.5よりも高いことから、受講者は被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力を高いことが示唆された。ただし、今回は事前事後の評価による検討を行っていないため、今後は事前事後の変化について調査を行っていく必要があるといえる。

表8 「歩いてマイマイ」におけるアンケートデータ

効果の種類	平均値	標準偏差
被害防止能力	3.118	0.395
コミュニケーション能力	3.111	0.436
地域への愛着心	2.986	0.590
非行防止能力	3.493	0.512

(3) 防犯ウォーキングアプリ「歩いてマイマイ」における報告データとアンケートデータの関連の検討

防犯ウォーキングアプリ「歩いてマイマイ」における報告データとアンケートデータの関連について検討するため、相関係数を算出した。その結果、報告データの報告総数は安全報告数 ($r = .739, p < .05$)、危険報告数 ($r = .853, p < .01$)、見えやすい付与数 ($r = .745, p < .05$)、見えにくい付与数 ($r = .786, p < .05$) と有意な正の関連が認められた。安全コメント観点数は安全報告数 ($r = .846, p < .01$)、見えやすい付与数 ($r = .770, p < .05$) と有意な正の関連が認められた。見えやすい付与数は安全報告数 ($r = .991, p < .01$) と有意な正の関連が認められた。見えにくい付与数は危険報告数 ($r = .921, p < .01$)、入りやすい報告数 ($r = .806, p < .05$) と有意な正の関連が認められた。アンケートデータのコミュニケーション能力は被害防止能力 ($r = .803, p < .05$)、地域への愛着心 ($r = .884, p < .01$)、非行防止能力 ($r = .749, p < .05$) と有意な正の関連が認められた。報告データとアンケートデータには有意な関連が認められなかった。

報告データ間の関連から、安全の「見えやすい」「入りにくい」と危険の「見えにくい」「入りやすい」はキーワードとして、適切であることが示唆された。また、アンケートデータ間の関連から、被害防止能力、地域への愛着心、非行防止能力はコミュニケーション能力を高めることが示唆された。さらに、報告データとアンケートデータは関連がないことから、安全や危険の報告数などに関係なく、被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力が高まる可能性が示唆された。したがって、単に報告を多く行うのではなく、しっかりと安全箇所と危険箇所を考えることが重要であるといえる。

4-3. 事後アンケートによる授業全体の教育の効果の検討

事後アンケートによる授業全体の教育の効果について検討するため、香川大学が作成した「フィールドワークを取り入れた授業科目に関する学生アンケート」の各項目の検討および自由記述の内容の検討を行った。

(1) 「フィールドワークを取り入れた授業科目に関する学生アンケート」の検討

「フィールドワークを取り入れた授業科目に関する学生アンケート」の各項目について検討するため、数値化できる項目の平均値と標準偏差を算出した。表 9 は振り返りアンケートの各項目の平均値と標準偏差を示したものである。1 から 5 点の 5 件法で全ての項目において 3 点よりも高いことから、さらに「フィールドワークにより地域に愛着を持てるようになったと思いますか?」と「フィールドワークにより今後自信をもって社会に出ることができるようになったと思いますか?」以外は 4 点を超えていることから、受講生は「フィールドワークを取り入れた授業科目に関する学生アンケート」の各項目の得点が高いことが示唆された。さらに、「フィールドワークの訪問先は、授業科目の学習内容に照らして適切だったと思いますか?」と「フィールドワーク先で行った学習は、授業における到達目標を達成する上で役に立ったと思いますか?」の得点が高かったことから、本科目におけるフィールドワークが適切なものであったことが示唆された。また、「フィールドワークに向けての準備学習は、授業における到達目標を達成する上で役に立ったと思いますか?」の得点も高かったことから、専門家による講義が有効であったことも示唆された。このことから、事後アンケートにおいて本科目の多大な教育効果が示されたといえる。

表 9 「フィールドワークを取り入れた授業科目に関する学生アンケート」の各項目

	そう思わない	どちらかといえば思わない	どちらともいえない	どちらかといえば思う	そう思う	平均値	標準偏差
フィールドワークの実施時期や時間帯は適切だったと思いますか?	0	1	1	4	9	4.400	0.880
フィールドワークの訪問先は、授業科目の学習内容に照らして適切だったと思いますか?	0	0	1	2	12	4.733	0.573
フィールドワーク先で接した人物は、授業科目の学習内容に照らして適切な人物だったと思いますか?	0	0	1	5	9	4.533	0.618
フィールドワークに向けての準備学習は、授業における到達目標を達成する上で役に立ったと思いますか?	0	0	1	3	11	4.667	0.596
フィールドワーク先で行った学習は、授業における到達目標を達成する上で役に立ったと思いますか?	0	0	1	2	12	4.733	0.573
フィールドワークの内容を踏まえてのその後の学習内容は、授業における到達目標を達成する上で役に立ったと思いますか?	0	0	2	5	8	4.400	0.712
フィールドワークの内容は、シラバスに適切に記載されていたと思いますか?	0	0	3	4	8	4.333	0.789
フィールドワークにより地域に貢献できたと思いますか?	0	0	2	11	2	4.000	0.516
フィールドワークにより課題探求力、課題解決力が身についたと思いますか?	0	0	4	7	4	4.000	0.730
フィールドワークにより主体的な学びができるようになったと思いますか?	0	0	2	5	8	4.400	0.712
フィールドワークにより地域に愛着を持てるようになったと思いますか?	0	0	7	4	4	3.800	0.833
フィールドワークにより今後自信をもって社会に出ることができるようになったと思いますか?	0	0	8	3	4	3.733	0.854

(2) 自由記述の内容の検討

授業の自由記述の内容について検討するため、15 回目の講義の際に授業を受けて感じた感想の自由記述の内容について、大学教員 2 名と大学院生 1 名でカテゴリー分類を行った。表 10 は自由記述の内容についてカテゴリー分類を行った結果を示したものである。その結果、授業による意識の変化、学習内容の理解、授業の形式の評価という 3 つの大カテゴリーが抽出された。まず、授業による意識の変化は、地域防犯への関心、防犯意識の向上、防犯活動の推進の小カテゴリーから構成されているが、大学生の防犯活動の理解・促進と

未来の防犯ボランティアの育成という本科目を立ち上げることになった主眼と合致しており、こうした小カテゴリーが抽出されたことから、防犯活動の活性化の一翼を担う科目であったと考えられる。また、本科目では、地域での防犯活動に関心（共通教育スタンダードにおける「地域に関する関心と理解力」に対応）を持ち、安全・安心な地域づくりを担う人材を養成することも目的としているが、こうした目的に沿った科目であったと考えられる。次に、学習内容の理解は、犯罪機会論への理解、防犯への多面的な理解、自転車盗・万引きへの理解の小カテゴリーから構成されているが、本科目では犯罪機会論の観点から、様々な講義を聴いた上で犯罪の起きやすい・起きにくい環境を考える3つのフィールドワークを行ったことから、学生の犯罪機会論への理解、防犯への多面的な理解が深まったと考えられる。また、自転車盗・万引きについても、具体的な防犯対策の提案を行っていることから、学生の理解が深まったことが推測される。最後に、授業の形式の評価は、フィールドワークとグループワークの評価、講演への評価、その他の小カテゴリーから構成されているが、本科目ではフィールドワークはもちろん、講義形式の回であってもできるだけグループワークを取り入れるなどの工夫を行ってきた。こうしたフィールドワークやグループワークが学生に評価されたことから、授業の形式が学生に支持されるものであったといえる。さらに、外部講師に関しても、実際に講義や講演を聴いた上で、講義の上手な方々に依頼したため、学生から評価されたと考えられる。以上の結果から、具体的な記述からも本科目の多大な教育効果が示されたといえる。

表 10 自由記述のカテゴリー分類

大カテゴリー	割合 (度数)	小カテゴリー	割合 (度数)	具体例
授業による意識の変化	40.4 (23)	地域防犯への関心	15.8 (9)	地域のことに、より深く興味を持つことができました。 防犯を考える授業を通して、もっと自分の地域についてよく知ろうと思った。
		防犯意識の向上	12.3 (7)	この授業を受けて防犯に対する意識がかなり高まったと思う。 この授業を受けて、防犯に関する知識を身につけることができ、防犯に対する意識も変わった。
		防犯活動の推進	12.3 (7)	今回の授業で学んだことを活かして自分の身を守ったり、周りの人を守ったりしてあげたい。 これからの日常生活でも、防犯を意識し、少しでも自分の地域に貢献できるよう、これからボランティア等にも参加してみたいと思いました。
学習内容の理解	35.1 (20)	犯罪機会論への理解	15.8 (9)	防犯においては、何よりも、犯罪が起きる環境（起きやすい環境）を知り、それに対して対処していくことが重要だと思った。 見えにくく、入りやすい所が危険だと分かりました。
		防犯への多面的な理解	10.5 (6)	十五回授業を受けてきて、様々な面から防犯について勉強してきて、とてもためになることばかりでした。 防犯をする為に存在する、地域の様々なシステムにふれることのできた授業だった。
		自転車盗、万引きへの理解	8.8 (5)	自転車盗難のフィールドワークでは、高級そうな自転車やなぜか黒い自転車など意外なものにカギがかかっていないことに驚いた。 スーパーでのフィールドワークを通して、今まで何も考えずに買い物をしていたのが、「ここが危ないな」という観点をもつようになった。
授業の形式の評価	24.6 (14)	フィールドワークとグループワークの評価	15.8 (9)	フィールドワークができる授業が大学に来て少ないため、楽しかったです。 疑問をグループで考察していくことができたので、面白かった。
		講演への評価	5.3 (3)	普段は体験できないこと、ゲストを招いて貴重なお話を聞くことができ自分にとって実りある時間だったと感じる。 講演でいるんな分野の方のお話を聞いたりして、学ぶことがたくさんありました。
		その他	3.5 (2)	このタイミングで受けて本当に良かったと思う。 ポスター採用して下さり、ありがとうございました！

5. おわりに

香川県警察の全面協力の下で連携事業の一環として新設された主題 C「地域での防犯を考える」は 2 年目を迎えた。1 年目は試行錯誤しながらの授業構成であったが、今年度は 1 年目の取り組みをさらに発展させる形で内容も充実し、これまで見てきたとおり、地域志向を目指す大学にふさわしい教育効果があることが示された。また、本科目でのフィールドワークは、1 年目から新聞やテレビ等メディアにも取り上げられ、2 年目である今年度のフィールドワークも新聞やテレビ等メディアに大きく取り上げられた。大学生が地域での防犯を考える本科目は、安全・安心な地域づくりを担う人材を養成することを目的としたが、こうした人材育成に貢献できる科目であったといえる。

また、外部講師による講義も評価され、3 つのフィールドワークについては、大学生の身近な問題であり、さらに専門家に対して提案を行っていくことから、学生にとって大きな教育効果があることが示された。駐輪場でのフィールドワークとポスター掲示による啓発では、香川大学において、自転車の盗難が大きな課題となっているため、今後の啓発を考える上でも一つの指針となる成果が得られた。そして、今後は大学構内での自転車の盗難対策として、施錠率の向上を広く啓発していく必要があるといえる。店舗でのフィールドワークでは、調査だけでなく、大学生による買い物支援も行ったが、こうした取り組みから超高齢社会の地域の中で若者が防犯において何ができるのかを考える契機となった。白松・久保田（2016）の実践同様に、地域の社会的紐帯による犯罪防止の重要性を知ること、地域での防犯に様々な形で貢献できることを知り、地域防犯活動に関心をもつことができたといえる。防犯ウォーキングアプリを用いたフィールドワークでは、防犯効果の高い地域安全マップ作成を通して、学生の被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力が高いことが示唆された。この地域安全マップは、割れ窓理論や防犯環境設計などの犯罪機会論に基づいて、監視性と領域性の観点からコミュニティを点検し、子どもの被害防止能力の向上を目指すものであり、小宮（2005）によって考案され、各地で実践されてきている（平、2007）。こうした実践は、アプリ上でデータを共有することでさらに効果が高まることが予想されることから、今回の取り組みで地域安全マップ作成をさらに進化させた点に意義があるといえる。

最後に、大学生の犯罪防止も視野に入れ、将来の防犯の担い手を育成するために、県警察と大学が連携して、15 回の授業を行っていくというスタイルは全国初の取り組みであり、他に類を見ないものである。今後の地方志向を目指す大学の地域貢献の一つのあり方を示すことができた点で非常に意義のある取り組みであったといえる。

参考文献

濱本有希・平伸二（2008）「大学生による小学生への地域安全マップ作製指導とその効果測定」『福山大学こころの健康相談室紀要』2、35-42 頁。

- 平伸二 (2007) 「地域安全マップの作製とその効果測定」『福山大学こころの健康相談室紀要』1、35-42 頁。
- 小宮信夫 (2005) 『犯罪は「この場所」で起こる』光文社。
- 小宮信夫 (2006) 『地域安全マップ作製マニュアル改訂版：子どもと地域を犯罪から守るために』東京法令出版。
- 小宮信夫 (2013) 『犯罪は予測できる』新潮社。
- 大久保智生 (2014) 「香川県における万引き防止の取組：万引き認知件数全国ワースト1位からの脱却」『刑政』、125 (10)、12-23 頁。
- 大久保智生・有吉徳洋・千葉敦雄・垣見真博・山地秀一・山口真由・森田浩充 (2017) 「店舗における地域と連携した防犯対策の評価：安全・安心まちづくり推進店舗の認定を通して」『香川大学教育学部研究報告』148、1-8 頁。
- 大久保智生・石岡良子・堀江良英・垣見真博・岩田健嗣・山地秀一・木村光宏・山口真由・三好弘美・森田浩充 (2016) 「特殊詐欺撲滅ネットワーク会議および高齢者の防犯教育推進のための研修会の効果の検討：地域ぐるみの特殊詐欺対策推進のために」『香川大学教育学部研究報告』146、1-8 頁。
- 大久保智生・垣見真博・太田一成・山地秀一・高地真由・森田浩充・久保田真功・白松賢・金子泰之・岡田涼 (2018) 「香川県における防犯ボランティアの活動内容と課題の検討：ボランティアへの参加動機と援助成果、地域との交流との関連から」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』23、65-74 頁。
- 大久保智生・西本佳代 (2016) 「香川大学1年生の問題行動の実態：コンプライアンス教育のための実態把握」『香川大学教育研究』13、41-53 頁。
- 大久保智生・時岡晴美・岡田涼編 (2013) 『万引き防止対策に関する調査と社会的実践：社会で取り組む万引き防止』ナカニシヤ出版。
- 大久保智生・山下勝正・田中晶・高地真由・吉見晃浩・森田浩充・加藤学・白松賢・久保田真功・金子泰之・岡田涼 (2018) 「地域で見守り活動を行うボランティア対象の研修会および店舗対象の防犯 CSR 講習会の効果の検討：地域と店舗の連携による地域防犯活動の活性化のために」『香川大学教育学部研究報告』150、13-22 頁。
- 白松賢・久保田真功 (2016) 「「学校・家庭・地域の社会的紐帯」による万引き防止の可能性：試行モデル事業による課題探求」『愛媛大学教育学部紀要』63、31-38 頁。